

## 論文の内容の要旨

論文題目   ベンヤミンのアレゴリー的思考  
——デーモンの二義性をめぐる概念連関——

氏   名   山口 裕 之

本論文はベンヤミンの三つの著作『カール・クラウス』、『ボードレールにおける第二帝政期のパリ』、『ドイツ悲劇の根源』を中心的な対象としながら、彼の「初期」の思考に顕著な神学的・秘教的特質と「後期」の思考を特徴づける唯物論的・政治的特質がどのように媒介されるかを、ベンヤミンの思考における三段階的な展開の枠組み、およびそのうちに構造的に組み込まれているアレゴリーの考察を通じて示し、またそれによって、彼が方法論的に提示する「アレゴリー的な見方」を明らかにすることを目指している。

第一章では、「全人間」、「デーモン」、「非人間」という三つの章からなるベンヤミンのクラウス論をその外的構造に従った思考モデルとして分析することによって、本論文全体に通底するベンヤミンの思考における三段階的な展開の枠組みを示すことになる。クラウス論では、「全人間」という人物像のうちに描き出される「古典的ヒューマニズム」から、「デーモン」像における「古典的ヒューマニズム」の否定をへて、「非人間」の体現する唯物論的な方向での「現実的ヒューマニズム」への転換が弁証法的な構成によって示される。こういった思考モデルの提示においてとりわけ特徴的であるのは、まずベンヤミンが第二段階の「デーモン」を規定する「二義性」という特質を執拗に指摘していることである。ク

ラウス論における「デーモン」の「二義性」は、単にこの形象のもつ曖昧さ・いかがわしさを表すのではなく、彼の初期の著作にも見られる「デーモン」や「二義性」の概念内容を取り込みつつ、第三段階の「現実的ヒューマニズム」への展開の可能性を胚胎するものとして示されている。この「二義性」はまた、パサージュ論の連関において述べられた「弁証法的形象」のうちに認められる「静止状態にある弁証法」の特質として理解することができ、その意味においてパサージュ論の問題圏に直接に結びついてゆく。このデーモ的な二義性が支配する領域を「非人間」の「現実的ヒューマニズム」へといたらせる力を、ベンヤミンはとりわけ「破壊」と「根源」という両極的要素を特質とする「引用」のうちに見る。彼にとって「引用」は、デーモンの連関におかれた事物・言葉をその連関から破壊的に取り出し、それを新たな連関のうちに置くことによって「根源」を別の仕方において回復させる機能をもっている。ベンヤミンはこの力を「非人間」クラウスのうちに認めるとともに、そのような機能を持つものとして「引用」を自分自身の方法論的な基盤に据えることになった。

第二章では、『ボードレールにおける第二帝政期のパリ』およびこれを含む本来の構想（「ボードレール論」）をクラウス論との構造的な並行性のうちにとらえることによって、ベンヤミンの後期の思考においてこの著作がもつ位置を示すとともに、この著作のうちに見られる特徴的な概念をその連関において明らかにする。『第二帝政期』は本来、パサージュ論の「ミニチュアモデル」として考えられていた三部構成の「ボードレール論」のうち、その第二部として構想されていた。つまり、『第二帝政期』はクラウス論における第二章「デーモン」と構造的に対応関係を持ち、「デーモン」の章がクラウス論の全体において占めていた位置を「ボードレール論」全体の中でとるものと見なすことができる。

『第二帝政期』の全集版テキストに見られる三つの章の展開を通じてベンヤミンの視点は、外側から社会を見るアウトサイダーの類型としての「ボヘミアン」（職業的陰謀家、下級の陰謀家としての屑屋、文士）から、社会の内側において「遊歩者」というアウトサイダーとして存在することを可能とする「大衆」へと向かい、さらにこれらアウトサイダーや大衆を可能とした「近代」そのものの特質へと収斂していく。『第二帝政期』を通じてベンヤミンはさまざまな事象に見られる二重性を指摘していくが、この特質はなによりも彼が古典古代と近代の相互浸透としてとらえる「ディゾルヴ」という概念のうちに集約される。没落する近代とそれとともに浮かび上がってくる古典古代が二重写しにされる「ディゾルヴ」は、ベンヤミンにとってまさにアレゴリーのあり方として提示されている。アレ

ゴリーとしてとらえられる都市の中のさまざまな形象は、パサージュ論の連関において述べられた「弁証法的形象」として、弁証法的な展開をたどるべき両極的要素が時間性を捨象され「静止状態」のうちに凝固した「二義性」をそのうちにもつ。「高度資本主義の社会」としての「近代」（およびその特質を一身に担った「英雄」という人物像）は没落を定められたものでありながらも、「弁証法的形象」としての「アレゴリー」のもつ「二義性」のうちに弁証法的な解決の可能性を胚胎するものとして位置づけられる。その「アレゴリー」を「陰謀家」としてのボードレーは都市を題材とする彼自身の詩のうちに潜伏させている。ベンヤミンはこのようにしてブランキと重ね合わされたボードレーのうちに、クラウス論で提示されたような「現実的ヒューマニズム」へと向かう芸術の政治的可能性を読みとろうとしている。

第三章では、クラウス論やボードレー論に顕著に見られる唯物論的な志向をもつ三段階的な展開の枠組みや、その第二段階において決定的な意味を持つことになる「アレゴリー」、「デーモン」、「二義性」といった概念が、ベンヤミンの初期の思考の集大成である『ドイツ悲劇の根源』においてどのように準備されていたかという視点から、この著作の中心的な論点である「自然史」、「アレゴリー」、「根源」をめぐる概念連関に光を当てている。

ベンヤミンにおける「自然史」は、神学的コンテクストでは神の恩寵の領域に属する「歴史」が被造物の罪の連関にとらわれた「自然」のうちに形象（とりわけ「廃墟」）となったものを意味するとともに、歴史哲学的コンテクストでは（自然史に対置される）純粋な歴史の時間の流れのうちに存在する、時間性が空間化された形象でもあり、また理念論のコンテクストにおいては現象の世界のうちに存在しつつ理念を指し示す「根源的なもの」でもある。「アレゴリー」とはそういった形象そのものとして純粋な歴史の世界、現象の世界のうちに現れる。アレゴリーは、宗教史的・文化史的な視点においても異教的なデーモンの罪の連関にとらわれた形象であるとともに、弁証法的な展開における両極を時間性が捨象された「二義性」として自らのうちに含む空間的形象でもある。自然史が形象化されたものとしてのアレゴリーは、このように罪の連関にとらわれ、純粋な歴史の世界、現象の世界のうちに存在するものでありながら、他方それ自体が、理念の構造性が現象の世界へと展開される力の場としての「根源」を指し示し、理念の世界のうちへと再び救済されることを志向している。自然史としてのアレゴリーは、「一回性」によって規定される純粋な時間の流れのうちに、理念の構造性を指し示すがゆえに「反復性」という特質をもちつつ存在する。ベンヤミンの歴史概念は、この純粋な歴史のうちに存在する自然的な歴史が、

アレゴリーの「配置」・「布置(Konstellation)」による理念の表現によって、再び理念の構造的なうちに救済される展開のうちにとらえることができる。

結論としての第四章では、『ドイツ悲劇の根源』でベンヤミンがその枠組みを示した「アレゴリー」とその救済が、彼の「初期」および「後期」の思考全体においてどのような媒介的役割を果たし、またこのアレゴリー的思考のあり方がどのようなアクチュアリティをもちうるかを論点として提示している。現象の世界においてアレゴリーとして存在する自然史は、「根源的なもの」としての「前史」および「後史」を指し示している。理念の構造的性が展開される場としての「根源」（「前史」）、それが展開された現象・歴史の世界、そしてその現象の世界の諸要素（アレゴリー）が再び理念の総体性のうちに救済される「後史」という思考の枠組みは、後期の唯物論的思考においてはクラウス論やボードレー論に見られるような三段階的な展開を特徴とする思考へと接合されていく。その際、ベンヤミンは「救済」の場としての「現実的ヒューマンイズム」を提示することを試みるとともに、第二段階としての「近代」、すなわち現象の世界、歴史の世界のうちに「根源」を指し示すアレゴリーが存在する「近代」を、まさにそのアレゴリーの配置によって描き出すことにとりわけ大きな関心を向けている。ベンヤミンにとってアレゴリーは「理念の表現」（それがすなわちアレゴリーの救済となる）のために配置されるべき素材であるとともに、その配置の方法そのものに関わる思考のあり方を規定している。ベンヤミンは世界を現象のうちに自然史としてのアレゴリーが存在している場にとらえ、それらのアレゴリーの配置によって理念の構造的性を描き出そうとする。この「アレゴリー的な見方」において、配置されるべきものとしてのアレゴリーは、現象の世界からいわば「引用」されることになる。ベンヤミンはこうした思考のあり方を「19世紀の体系概念」、すなわち概念による対象の記述的把握をめざす思考に対置されるものとして提起したのである。本論文において明らかにしたベンヤミンのアレゴリー的思考は、彼自身意識していたように、とりわけ知覚のメディアの転換をとらえる視点に結びつくとともに、その方法的意識に基づいて書かれるはずであったパサージュ論の考察のためにも、その構造分析の基盤を与えるものとなりうる。